

第4章 アイルランド

《世界中のアイルランド人》

アイルランド系の人達は、世界中に約 8000 万人いる。しかし、アイルランド本国には約 464 万人(2015 年)しかいない。

昔、大飢饉やペストの流行、貧困などで、多くのアイルランド人は新天地を求め、祖国をあとにした。1845 年の大飢饉では、当時の人口 800 万人の約半分が、なかば難民に近い形でアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドへ移住していった。

筆者が、乗務でシカゴに滞在していたとき、ちょうど聖パトリックの祝日(St. Patrick Day)にあたったことがある。3 月 17 日は、世界中にいるアイルランド系の人たちが、聖パトリックを祝う日である。シカゴの大通りでは、アイルランド系市民主催による、はなやかなパレードが 1 日中行われていた。どのパレードも、長老たちが先頭にたっている。そして、人々は緑のタスキをかけたり、緑色の服を着たりしている。緑はアイルランドの象徴の色なのだ。テレビでは、ニューヨークやホノルルやマイアミでのパレードも中継している。アメリカには 4400 万人前後のアイルランド系住民がいる。アメリカの人口は約 3 億 2100 万人(2015 年)なので、9 人に 1 人弱はアイルランド系アメリカ人なのだ。

アイルランド人たちが新天地として選んだアメリカは、すでにプロテスタントのイングランド人や北欧系の人たちが主流の国になっていた。いわゆる WASP と呼ばれる人たちであり、かれらが支配階級を占め、国を動かしていた。WASP はホワイト・アングロサクソン・プロテスタント(White Anglo-Saxon Protestant)の頭文字であり、アングロサクソン系白人で、プロテスタント教徒を指している。なぜイングランド系と北欧系かといえば、イギリス人も北欧人も祖先がゲルマン系だからだ。

一方、カトリック教徒であるアイルランド人は、その祖先がアイルランド系ケルト人であり、ゲルマン系とは違う民族なのだ。

ニューヨークの中心街に聖パトリック教会がある。暗殺された元大統領の J・F・ケネディの葬儀が行われたことで有名な教会だ。やっとのことでアメリカに渡ったアイルランド人達は、みな貧しかった上、カトリック教徒である。本国でも、イングランドのアイルランド植民地化政策とプロテスタント化政策で、アイルランド人はずいぶんつらい思いをした。プロテスタント思想がより強い清教徒たちが多いアメリカでも、事情は同じだった。カトリックであるが故に、よい仕事につけず、貧しい生活を強いられた。貧

しいアイルランド人たちが、自分たちの心のよりどころにするため、少しずつお金を出し合って建立したのが聖パトリック教会なのだ。

貧しかったアイルランド系の住民たちは、助け合い努力し、アメリカ社会の中で今日の地位を築いてきた。成功する者も出てきた。その代表がフィッツジェラルド家出身のジョン・フィッツジェラルド・ケネディである。フィッツジェラルドは典型的なアイルランド系の姓である。その大統領が暗殺されてしまった。アイルランド系アメリカ人にとっては、許せない事件となった。その葬儀は、アイルランド系アメリカ人の心のよりどころとなっている聖パトリック教会で盛大に行われた。アイルランド系出身で大統領になった人では、ロナルド・レーガンやビル・クリントンがいる。第 43 代大統領のバラック・オバマも、母方の先祖はアイルランド出身なのだ。

《パトリック》

アイルランド人 CA と乗務をしたとき、アイルランド人のことが話題になった。その CA が、

「イギリス人たちは、私たちアイルランド人のことを "パディ(Paddy)" って呼ぶの。私たち自身も "パディ" って呼ぶこともあるわ。"パディ" はアイルランド人の別称なの」

と話してくれた。アイルランド人はパディの他に、パット (Pat) と呼ばれることもある。イギリス人はジョン・ブル(John Bull) と呼ばれている。パディはパトリックの愛称である。カトリックの家では、男の子が生まれるとパトリック、女の子ならパトリアという名前をよくつける。「パトリック」は聖パトリックからきている。カトリック系イギリス人もパトリックやパトリアという名前をよくつける。筆者が担当した 5 期の「ティッシュ」のニックネームで呼ばれていたパトリアがそうだった。彼女はイギリス人であるが、家族はカトリック系教会に所属していた。

アイルランド系カトリックの人たちは、このアイルランドの守護聖人である聖パトリックを、実に愛している。聖パトリックを信じているアイルランド人は、プロテスタントに改宗するようイギリスから迫害を受けても、自分たちの信仰を守り続けてきた。アメリカに渡ったアイルランド人たちも、また、自分たちの宗教を守り続けていた。そして、3 月 17 日になると、何日も前から準備をし、家族とともに聖パトリックの日を祝うのである。

《聖パトリック》

聖パトリックが、アイルランドに入りキリスト教の布教を始めたの

は 432 年である。イングランドに聖アウグスティヌスが入ったのが 597 年なので、アイルランドの方が、165 年ほど早いことになる。聖パトリックは、もともとブリテン島に住んでいたが、アイルランドの海賊によって奴隷としてアイルランドに連れてこられ、やがてローマに売り飛ばされてしまう。そこから何とか逃げだし、今度は、福音を伝えるために再びアイルランドに渡り、全国くまなく伝道して歩いた。ついにアイルランドの司教と、人々から崇められるようになった。伝説では、アイルランドから毒虫と蛇を追い払ったとも言われている。アイルランドに蛇がいないのも聖パトリックのお陰だと信じられている。

《ケルト人》

また別のフライトで、アイルランド人のスチュワート(男性乗務員)と乗務する機会があった。彼は、筆者がロンドンで採用面接した 1 人である。俳優のシルバス・スタローンに雰囲気似ている。ややごつい印象だったが、前職が小学校の教師であり、話してみるとやさしい心の持ち主だったので採用することにした。

「日本人から見ると、イギリス人もアイルランド人も同じに見えるのだけど」

「私たちが、日本人も韓国人も中国人も同じに見えますよ。ところで、典型的なアイルランド人は、ブロードと赤毛が混じたような髪の色をしています。肌は少し青白い(Pale Skin) 感じで、顔にはそばかす(Freckles) があり、目の色はややグリーンがっています」

これが、ケルト系アイルランド人の特徴なのだ。テレビや映画で、肌がいやに白く、赤毛のまつげがやたらと目立つ俳優を見たことがあると思う。

ケルト人は、アイルランドの他に、イングランドやスコットランドやフランスのゴール地方にも住んでいた。その昔、スペインのイベリア半島あたりから移住してきた民族と言われる。イングランドやスコットランドにいたケルト人は、アングロサクソンと混ざり合うか追い払われたりした。フランスのケルト人は北欧からきたノルマン人たちと交わり合った。

アイルランドは、歴史の中で、バイングに襲われたり、イギリスの植民地政策を受けたりしたが、自分たちの民俗を守り続けてきているので、ケルト人がそのままアイルランド人になったと言える。イギリスほど他民族に侵略されていない。アイルランドにも、一部のバイングやアングロサクソンやノルマン人が住みついたので、金髪で青い目の人たちもいる。

《首都ダブリン》

アイルランドの首都ダブリン(Dublin)は、バイングがつくった町として有名だ。700 年代の終りから 800 年代にかけて、植民地をつくるために、バイングが大挙してアイルランドに押しかけてきた。その拠点を、ダブリン市中を流れるリフィー(Life)川の河口につくった。それが、のちにダブリン市に発展したのだ。「ダブリン」は「黒い水たまり」(Dark Pool) を意味している。英語読みでは"Dublin"であるが、ケルト人の言葉であるゲール語では、"Bailer Athol Cleat" と呼び、「町を二分する障害になる流れ」という意味だそう。これもアイルランド人 CA が教えてくれた。

《アイルランド人お断り》

パティという言い方を教えてくれたアイルランド人 CA が、「アイルランドが、共和国として独立したのは 1948 年なの。つい最近の話なの。それまでにも、何度か独立の機運があったけれど、Britain の介入があったり、国内での調整がうまくいかなかったり、なかなか独立できなかったの。独立したといっても、北アイルランドはまだイギリス領なの。「北アイルランドもアイルランド人に返せ」と言っている過激派組織の IRA(アイルランド共和軍 Irish Republican Army) は、イギリス国内で爆弾テロを行っていたの。イギリス人たちは、最近まで、商店の入口に「犬とアイルランド人はお断り」の看板を貼ってあったらしいの。この話をよくパパとママが話してくれたわ。私も含め、多くのアイルランド人は、テロによるやり方には賛成していないけど……」

《被征服民族》

韓国の方が、日本で居住したり働いたりすることは、簡単にはできない。同様に、日本人が韓国で仕事についたり居住したりするのも難しい。どちらも労働ビザが必要となる。このビザは簡単には取得できない。

ところが、アイルランド人がイギリスで仕事を見つけたり、住んだりするのは、それほどむずかしくない。だから、今回の採用募集でもアイルランド人が応募してきている。アイルランドとイギリスの往来はかなり自由だった。

けれど、アイルランド人がイギリスで生活するのは、それなりに緊張感をともなうらしい。言葉(アイルランドなまりの英語)や肌の色や顔つきでアイルランド人であることがすぐ分かる。イ

ギリス人の中には、いまだにアイルランド人を見下している人もいる。反対に、日本人が韓国人と接するとき、朝鮮人と呼んだりしないよう気をつけているように、イギリス人も、アイルランド人と接するときは、話の内容や言葉づかいに気がつかっている人もいる。

「いま話したこと、British Crew には言わないでね」

「君たちは、British と一緒に飛ぶし、滞在先では一緒に食事したりするんだろ。そんなとき、北アイルランド問題のことなどを話すことはないの」

「親たちは、British に対して一種の感情を持っているけれど、若い人たちはあまりそういう話はしないわ。アイルランドと Britain の関係について話しても、お互い気まずい思いになるだけだから、Irish も British もお互い無意識のうちに避けるようにしているわ。わたし自身、British の前では、決して口に出さないわ。だから(犬とアイルランド人お断り)の話も、British Crew たちの前で話題にしないでほしいの」

韓国と日本の関係でも、政治問題として、日本の韓国統治や日本軍の行なったことが槍玉に上がる。しかし、韓国人同士で話をしているとき、この話題になることがあるかもしれないが、日本人の前では、やたらと口に出さない。これと同じである。市民レベルではお互い抑えている。

特に、アイルランドでは、若い人たちが、国内で仕事を見つけるのは簡単ではないし、見つかったとしても、給料はイギリスに比べ低い。だからアイルランドの若者たちは、仕事を見つけにイギリスに渡ってくる。過去のことにわだかまりを持っていても始まらない。

《800年の恨み》

アイルランドのことを知るには、英国との関係を抜きにはできない。先にも書いたように、アイルランドが、英連邦から完全に離れたのは 1948 年であり、戦後のことである。その翌年にアイルランド共和国として発足し、現在に至っている。

最初に、アイルランドをイングランドに併合しようとやってきたのはノルマン人だった。ノルマンコンクエスト(1066年)でイングランドを征服したノルマン人は、その勢いで、アングロサクソンたちとともに、1169 年ころからアイルランドに侵入し始めた。それ以来、1948 年の独立まで、約 800 年の間、アイルランドは英国の支配下におかれてきた。しかし、独立したが、北アイルランドはまだ英国の領土のままとなっている。返却を望むアイルランド

側と、それを拒む英国側の交渉がずっと続いてきている。アイルランドの完全独立まで、英国に対して過激的行動をしているのが、アイルランド共和軍 (IRA) である。爆弾事件が、時折、新聞をにぎわしている。この過激集団に対して英国側も強力な取締りで対抗している。この 50 年間で、爆弾テロなどで、3200 人以上が犠牲になっている。

1100 年代の終り頃から、ノルマン人のアイルランド侵攻が始まった。ところが、ノルマン人の征服者たちはアイルランドが気に入らな、土着化していった。ノルマン・コンクエストでイングランドに入ったノルマン人もイングランド人化して、本国フランスと争いを始めるようになった。それと同じことが起こるのを恐れたのか、1300 年代の中頃には、イングランドは、アイルランドを統治している総督に、人種差別政策をとるよう指示した。ノルマン人はアイルランドの名前や服装を禁止し、アイルランド人との結婚やアイルランド語を使うことも禁止した。

まだ、この頃までは、ノルマン人もアイルランド人も、同じカトリック教徒だった。ところが、例のヘンリー 8 世の時代 (1500 年代中頃) になると、イングランドは、ローマ・カトリック教会から離脱してしまう。ここから、イングランドとアイルランドの関係に、宗教問題が入ってくるのだ。その後、イングランドはアイルランドに対して、プロテスタント化政策を行うようになった。

アイルランド人にとって、宗教は常に重要なものであった。しかも、イングランドがプロテスタントになったのは、王様の不敬がキッカケとなった。アイルランドのカトリック僧侶が中心になり、1534 年に全面的な反乱が勃発する。

《エリザベス 1 世とアイルランド》

1500 年代の後半になると、ヘンリー 8 世の娘であるエリザベス 1 世が、アイルランド政策を引き継いだ。彼女も、アイルランドを何とかイングランドのものにしようとした。その一つが「プランテーション(植民)政策」である。アイルランド人から土地を取り上げ、忠実なるイングランド臣民に与えてしまった。「プランテーション政策」に反対してアイルランド人は反乱を起こしたが、結局、イングランドに破れてしまう。エリザベス 1 世時代のイングランドは、スペイン艦隊を破り、勢いもあり国力がついてきていた。頼りにしていたスペインも応援に駆けつけてくれなかったのだ。

1600 年代になると、エリザベス 1 世亡き後、スコットランド王ジェームズ 1 世が、スコットランド王とイングランド王を兼ねることになった。ジェームズ 1 世も、アイルランド侵略政策を踏襲した。もともとスコットランド王であったジェームズ 1 世は、アイルランド人から

取り上げた北アイルランドの土地に、大量のスコットランド人を移住させる政策をとった。これが、現在の北アイルランド問題の発端である。このときに、土地を奪われたアイルランド人と、プロテスタントで植民者のスコットランド人、イングランド人の対立の構造ができ上がったと言われている。

1600年代の中頃、ヘンリー8世、エリザベス1世亡きあとのイングランド国内は、プロテスタント化したものの、カトリックも勢力奪回を図っていた。後ろには、カトリック国のフランスとスペインがついている。なんとかイングランドをカトリックに戻そうと画策していた。

ジェームズ1世の跡を引き継いだチャールズ1世は、カトリックにも理解を示した国王だった。カトリックの勢いが強くなることを恐れたプロテスタントは、1649年に「清教徒革命」を断行した。この時、活躍したのが Cromwell である。国王のチャールズ1世の首を切り、カトリック教徒を徹底的に迫害した。

《Cromwell》

国王を処刑した Cromwell は、今度は、カトリック教徒を一掃するために、ダブリンに精鋭部隊を送り込み、アイルランド国内で虐殺を行った。この虐殺でアイルランド人の4分の1が殺され、生き残った者の中には、西インド諸島に、奴隷として売り飛ばされてしまった人もいた。奪った土地は、活躍した兵士や入植者に与えた。このような背景から Cromwell は、アイルランド人にとって、歴史上もっとも嫌いな人物として胸に刻まれこまれている。

イングランドの対アイルランド政策は、時の国王の宗教観によって多少違っていた。Cromwell によって首を切られた王様チャールズ1世の息子たち、チャールズ2世とその弟のジェームズ2世は、清教徒革命の間、フランスに逃れていた。Cromwell のカトリック教徒に対する弾圧は、あまりにも激しかった。やりすぎだと思っていた国民も、彼の死でひと安心した。そして、フランスに避難していたチャールズ2世を呼びもどし、王位についてもらった。チャールズ2世のあと、王位についたのがジェームズ2世である。この2人の王様は、カトリック国のフランスに亡命していたくらいであるから、カトリック教徒に対しても同情的なところがあり、アイルランド人から奪った土地を返す政策をとったりした。あまり同情しすぎたため、英国内のプロテスタント教徒たちから反発を受けることになる。弟のジェームズ2世は、カトリック寄りだということで国外追放にあっけし、アイルランドに逃げて、そこで拳兵しプロテスタント軍と戦うが破れて

しまう。

《独立運動》

プロテスタント寄りの王様になれば、アイルランド政策は、また逆もどりする。1700年代には、英国に議会ができ、新しい刑法典が決められた。その法典には、アイルランドのカトリック教徒は、投票したり、軍隊に入ったり、子ども達をカトリックの教えにそって教育することまでも禁止する旨書かれていた。

アイルランド人たちは、自分たちの文化を守るため、裏に隠れ、「文化防衛学校」をつくり、かれらの言語や文学を教えつづけた。

1700年代の後半になると、独立の機運が高まってくる。特に、フランス革命(1789年)の影響が大きかった。独立運動家たちは、フランスの援助を得て革命を起こすが、結局、失敗に終わってしまう。そして、英国の策略で、アイルランド議会は英国と連合を組むことを議決してしまう。1800年には連合法ができ、アイルランドは合法的に英国の一部になってしまうのだ。

1828年になると、ダニエル・オコネル(Daniel O'Connell)という弁護士が、独立運動を始めた。彼は、ダブリンを二分するリフィー(Life)川にかかっている橋にその名前を残している。市民からの信頼が厚く、ダブリン市長経験後、アイルランド議会に選出された。各地で集会を開きアイルランドの独立を訴えた。ダウの丘の集会では、100万人もの人が集まったと言われている。

オコネルの運動に対して、英国はあらゆる策略をめぐらし妨害した。反面、集まったアイルランド人たちは、アイルランド独立のためには武力も辞さない主張する者も多かった。しかし、オコネルは平和主義的解決を図ろうとしたため、アイルランド人の力を、結集することができずに運動はバラバラになった。そこからアイルランド青年党のような武力解決を図る集団が出てきた。そして、アイルランド共和兄弟団(Irish Republican Brothers)という秘密結社ができた。IRBは、日本の新聞でもときどき話題になるIRAの前身となる組織である。

《大飢饉》The Great Famine

1845年から約4年の間、アイルランドは大飢饉になり、独立運動どころではなくなった。この飢饉で、100万人のアイルランド人が飢えのため死亡した。また、飢饉を逃れるためさら

に 100 万人の人々が国を離れて、イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドに移住していった。移住していった人たちが、移住先でアイルランド人社会をつくり、国外からアイルランド独立を支援するようになった。

《ボイコット大尉》

"Boycott"という英語は、1800 年代後半に、アイルランドにいたイギリス人領主のボイコット大尉の名前からきている。この大尉は、領主の中でもひどい人物だったらしく、アイルランド人からとても嫌われていた。そこで、当時の人たちは、この領主に反抗することを「ボイコットする」という意味で使うようになった。

1700 年代後半は、イギリスで産業革命が起こり、物の生産が大きく飛躍し、好景気の時代になっていた。アイルランドにも新しい産業が入ってきたが、景気のよい産業はプロテスタントが握っていた。また、1700 年代から 1800 年代は、それぞれの国が自分たちの国家を意識するようになった時代である。

British の中でも、アイルランドに住むうちに、アイルランドを自分の国と考える人も出てきた。1875 年頃には、プロテスタントのパネルが独立運動の闘士として活躍した。

1800 年代後半から 1900 年代かけてのアイルランドは、自治独立を掲げたグループと、イギリスとのつながりを主張するグループとの、アイルランド国内での勢力争いの時代である。それぞれのグループが軍隊を作り、いつ内戦が始まるかわからない状態が続いた。

国内での勢力争いが続いているところに、第 1 次世界大戦が始まったので、勢力争いは、一時、休戦状態になった。アイルランドは英国につくべきか、ドイツにつくべきか迷っていた。英国のために戦い、その功績によってアイルランド自治独立を勝ち取るということになり、アイルランド連隊は英国軍側につきドイツと戦った。中には、英国の敵はアイルランドの味方と考えドイツを応援するグループもあった。

《アイルランド独立》

英国は、第 1 次世界大戦のとき、アイルランドに駐留させていた軍隊の多くをドイツ戦線に送り込んだ。その隙についてか、アイルランド共和軍が反乱を起こした。イギリス人で構成するアイルランド警察隊とアイルランド共和軍の激しい戦いが続いた。この時、アイルランド共和軍を国外から支援したのが、海外に

いるアイルランド人たちであった。物質的援助だけではなく、世界に対して、アイルランド自治独立の正当性をアピールした。その結果、世界中は英国に対して、冷やかな目を向けるようになった。

1921 年に停戦が合意され、プロテスタントが多く住む北アイルランド 6 郡を除く、26 郡がアイルランドとして独立することになった。しかし、全面独立を主張するグループがまだ活動しており、アイルランド自由国軍との間で、内戦がつづいていた。1938 年になって、やっと新憲法が議会を通過し、アイルランドはエール(Eire ゲール語)という国名になり、完全に英国の支配下から離れることができたのだ。因みに、アイルランドは英語読みの名前なのだ。

《中立国アイルランド》

第 2 次世界大戦中に、中立を守った国としてスイスが有名だが、アイルランドも頑固に中立を守り通した国であることは、あまり知られていない。

戦後、新政府は「アイルランド共和国法」を議会で通過させ、アイルランドを正式な独立共和国として世界に対して宣言した。同時に、英連邦からも脱退した。アイルランド共和国を英語では "The Republic of Ireland" という。共和制の国だから、元首は大統領となる。1990 年に大統領になったマリー・ローソンや 1997 年の大統領選に勝ったマリー・マカリスは、二人とも女性大統領だった。

約 800 年にわたるイギリスの支配は終りを告げた。しかしアイルランド人の中には、真の独立は北アイルランドがアイルランドに戻った時だ、と主張する人々がいて、英国からの奪回をめざして武力闘争を行っている。

1998 年 4 月には、北アイルランド紛争についての和平交渉が、イギリスの首相トニー・ブレアとの間で行われ、かなりの進展が図られていると当時の新聞が伝えている。

《アイルランド人の名前》

ある時、アイルランド出身のグローニャと話をしていると、名前の話題になった。

「グローニャ、典型的なアイルランド人の名前ってあるのかい」

「私の "グローニャ(Grainne)" って名前は、英語読みにするとグレイス (Grace) なの。グローニャは典型的なアイルランド人の名前よ。グローニャの "Grain" は "Love" っていう意味よ」

「ほかに、女の子ならアッシュリン(Aishling)、キアラ(Ciara)、

男の子ならリアン(Rian)なんかもアイルランド名なの。たぶん British たちは、私の名前のつづりを見ても、こちらから教えないかぎり "クローニャ" と発音できないはずよ。Britain にはない名前だから…。アッシュリンの意味は"夢(Dream)"よ。夢見る女の子って感じなの。男の子のリアンは、リトルプリンス (Little Prince)よ」

「典型的なアイルランド姓っていうのもあるのかい」

「"O"や"Mac" で始まる姓は、たいていアイルランド

人よ。"Mac" はスコットランドでも使われているけど…」

パトリックは、アイルランドの守護聖人からきた名前であることはすでに書いた。またフツヅェラトも、アイルランド系の姓であることも分かった。独立運動のリーダーだったダニエル・オコネル (Daniel O'Connell)も典型的なアイルランド人の名前である。オニール (O'Neill) 、オブライエン (O'Brien) 、オコーナー (O'Connor)、オ'Donnell (O'Donnell) 、オ'Defy (O'Defy) 、オ'Shea (O'Shea)など、“O”ではじまる名前は、ほとんどがアイルランド系の人たちだ。また、ハンバーガーで有名なマクドナルド (MacDonald)のように、Macで始まる姓もアイルランド人に多い。Macで始まる名前は、もともとスコットランド人に多い名前である。アイルランド人に多いのは、昔、祖先がスコットランドからアイルランドに移住してきたためである。シェイクスピアの小説にでてくる「マクベス (Mac Beth)」はスコットランドの王様だったことから分かる。Macで始まる名前には、マックブライド (McBride) 、マックマーロー (McMurrough) 、マックニール (McNeill)などがある。Macは「誰その息子」を意味する。マクドナルドは「ドナルドの息子」ということになる。

《姓名と出身地》

“O”で始まる姓はアイルランド系の名前であり、MacもしくはMcで始まるのは、スコットランド人やアイルランドを祖先に持つ家系に多いことが分かった。たとえば、イギリス人が“オブライエン”という名前を耳にすると、この人はアイルランド系かもしれないと思う。「李(リ)さん」とか「朴(ハク)さん」と聞くと、日本人は「ああ、韓国系の人だな」と、思うのと同じ感覚と考えてよい。

これ以外にも、出身が分かる名前がある。ジョンズ (Jones) 、ジャックス (Jacks) 、デービス (Davis) 、ウィリアムス (Williams)のように、“S”で終わる名前は、ウェールズ人の場合が多い。Sonで終わるのはイングランド系の人たちに多い。たとえば、ジョンソン (Johnson) 、アディソン (Addison) 、テ

ウイットソン (Davidson)等がそうである。Macと同じように「誰その息子」の意を表している。グラッドストーン (Gladstone) 、リビングストーン (Livingston) のように、Stone(石)で終わるものも多いが、これはスコットランド系の人たちの名前である。

《アイルランド系有名人》

ジョン・F・ケネディが、アイルランド系一族の出身であることはすでに述べた。レーガン元大統領も、アイルランド系であることは知られている。

日本の学生なら誰でも知っている、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn)も、母親はキリシヤ人であるが、アイルランド出身である。英文科の学生におなじみのバーナード・ショウ (George Bernard Shaw)やオスカー・ワイルド (Oscar Wilde) 、ウィリアム・バトラー・イエーツ (William Butler Yeast)等も、アイルランド系の作家なのだ。

人物以外にも、歌では、「庭の干草」や「ダニー・ボーイ」が、アイルランドからきたことは、意外に知られていない。

《エマラルド・グリーン島の島》

聖パトリック記念日のパレードでは、みどり色のタスキをかけたリ、服装自体をみどり系でまとめたりして行進する。みどり色は、アイルランドを象徴する色なのだ。今、手元にアイルランド各地を紹介した本がある。平原地帯は、なだらかな丘陵がどこまでも続いている風景写真が出ている。また、あちこちにある湖水は、自然がそのままになっている。起伏のある海岸線もアイルランドの魅力となっている。平原地帯では牧牛を、高原地帯では牧羊が行われており、国全体が牧草地帯であるかのようだ。北アイルランドは、英国の影響もあり工業も盛んであるが、南アイルランド地方は牧畜・農業が中心となっている。土壌はあまり肥えていないため、栽培はジャガイモや麦類が中心だ。土壌の関係で、農産物も限られていることや、自然破壊が少ないため、町を少し離れただけで、自然と出会える牧歌的な国なのだ。その草原には、季節になると、草木が一面に咲きみだれている。そのようなところから、アイルランドは、別名エマラルド・グリーンの島と呼ばれている。

1990年代は、アイルランドも国家経済を向上させるため、工業誘致を盛んに行っている。現地に生産工場を建設し、アイルランド進出をしている日本企業も増えている。

《アイルランド人》

筆者自身、イギリス人もアイルランド人も区別がつかなかった1人である。ところが、彼女たちと何ヶ月間一緒にいて、だんだん違いが分かってきた。アイルランド出身のCAたちは、イギリス人CAたちに比べ、「情がある」というか「世話好き」というか、ウェットな心の持ち主が多い。そして、どちらかというとおとなしく、素朴なところがある。悪く言えば、田舎っぽい感じである。その点、イギリス人CAたちは、アカ抜けているが、ややクールなところがあった。アイルランド人CAは、相手への気のつかい方が、日本人に似たところがある。日本人に相通ずるところがあるのも、アイルランド人CAをかなり採用している理由のひとつになっている。飛行中に、あるアイルランド人CAに、

「アイルランドの人たちって、どんな人たちの」

と聞いたところ、

「アイルランド人って、ものをすすめるのが好きなの。うちの母なんか、ケーキを誰かにすすめて、相手が“欲しくない”と言っても、それでも“ほんとにいいの”と言いながら、またすすめるの。相手が“本当に結構です”といっても、“あなたはこのケーキ、きっと好きはずよ”と言ってまだすすめているの。そうそう、もつひとつ、アイルランド人って、お互いのきずなが強いところがあるわ。イギリス人は、たとえば、海外でお互いイギリス人だと分かってても、知らん振りしているところがあるけどアイルランド人は違うわ」

このアイルランド出身のCAの話聞いて、彼女たちがよく使う言い回しを思い出した。休憩時間に、

「You like tea?」(紅茶いらない?)

と聞いてくる。今は飲みたくないの、

「No, Thank you」

といって断ると、

「Are you sure?」(本当に?)

とかならず言う。そして

「I'm sure」(本当に飲みたくないんだ)

と答えても、また、

「Really?」(本当に?)

と言っていた。また、訓練最後の日、修了式のあとで、クラス全員にお別れの挨拶をしてと、アイルランド出身のアナマリがきて、

「You miss us?」

(私たちがいなくなってさびしくない)

「I miss you all. But I'm OK.」

(さびしいけど、大丈夫だよ)

「Are you sure?」(本当に大丈夫なの)

「I'm OK.」(大丈夫だよ)

「Really?」(本当に?)

と何度も念を押すのだった。「Are you sure?」は、いろいろな場面で使える表現であり、相手のことを思いやる言い回しなので、覚えておくとよい。だれかがどこかぶつけたり、転んだりしたとき、「大丈夫かい」と聞いて、「大丈夫」と答えても、「Are you sure?」となるのである。

《アイルランド英語》

英語と米語が、表現や使う単語に違いがあるように、アイルランド英語もイギリス英語とやや違う。訓練が始まって最初の頃、よく分からなかったが、慣れてくると彼女たちの喋る言葉が、少し違うことに気がついた。しかし、なんとなく違うような気がするが、具体的にどこが違うのか分からなかった。休憩時間に、また、英語の話題になった時、アイルランド出身の教え子に、

「君たちアイルランド人の英語は、British 英語と、なんとなく違うような気がするんだけど」

「使う単語も少し違います。例えば、“運動靴”のことを、British は“Trainers”と言いますが、私たちは“Runners”を使います。British 英語では、“戸だな”は“Cupboard”ですが、アイルランドでは“Press”と言います」
「発音も違うところがあるのですよ。“Film”のことを、イギリス人は“フィルム”と発音しますが、多くのアイルランド人は“フィルム”と発音してします。th 音もすこし違います。“That”は“ダット”、“Those”は“ドース”にちかい音です」

英語は、イギリス人がアイルランドに持ち込んできたものであり、アイルランドには、ケルトの流れを組むゲール語(Gaelic)がある。アイルランド英語は、ゲール語の中に英語が入ってきて混ざり合った。そのため、アイルランド独自の英語表現や発音が形成されてきた。

アイルランド人は、歴史の中で、自分たちの言葉を使うことを禁止されてきた。しかし自分たちの言葉を忘れないように、隠れてゲール語を伝承してきた。アイルランドは、英語国として知られているが、英連邦から完全独立後、ゲール語を国語として復活させる運動も盛んである。いまや、学校の授業にも、ゲール語の時間が取り入れられている。隠れて自分

たちの言葉を伝承する必要がない時代になったのだ。(参
考 「物語アイルランドの歴史」波多野祐造著)

— 続く —